

◇ 巻頭言 ◇

浅海重夫

日本の現代社会の諸悪の根源のひとつが、大学を頂点とする入学試験制度と、高中小校の教育実態にみられる学校教育のしくみにあるといっても過言ではない。にもかかわらず、大学がその改善に向けて強く歩み出しえない現状に、教育機関の当事者の1人として常にいらだちを感じている。

昭和54年度から、国立大学受験者に全国共通試験（一次テスト）を行うことが、国立大学協会の答申案にもとづく文部省の方針として決定し、いま全国の国立大学は大学独自に行う入試（二次テスト）をいかなる内容にするかの検討にせまられている。国大協の見解は、各大学・学部・学科の特殊性に応じ、〇×方式の一次テストの不備な点を補う形で、しかし全国大学間に方法の上で甚だしい差異のないような二次テストを行うのが望ましいとしている。ここで当お茶の水女子大学の、文教育学部の、わが地理学科として、二次テストはいかにあるべきかを考えながら、昨年末以来の学部内の議論をみると、次のような問題点が浮かび上る。

まず第1に、一次テストの有効性が未知数であるという理由から、本学部の二次テストは従来どおりの方法で行うという意見がかなり強いとみられること。その根底には文部省に対する大学人の自負といったものがあるかもしれない。しかし一次テストの上に従来どおり（文教育学部では英数国の3科目を各2時間ないし1時間半ずつ）の二次テストを行うとなると、受験生の準備負担の軽減、ひいては高校教育のひずみの改善という入試改革の根本目標からむしろ逆行するのではないか。全国高校長会議からも、二次テストは1～2科目に縮少して行うようにとの要望が出されている。

次にそもそも大学の入学試験とは、大学における専門学問領域に対する適性と基礎能力とをみるためのものである。とくに当お茶の水女子大学のような小規模大学では、学部学科の特殊性を生かした教育が入学後直ちに実施されることも可能である。しかるに、文教育学部の入試方法が3科目制になって以来、とくに地理学科の受験生について適性をみいだすことが難しくなった。適性の条件とは、何よりもその学問が好きであるということが第1であろう。

一次テストが実施されるのを機会に、地理学科としては、適性をみるための科目を1つずつ学科ごとに指定し（例えば、哲・史・地・教育学科では社会科の1つ、体・音は実技、国・中・英・仏はそれぞれやや高度の語学を）、他に学部内共通の1科目（記述能力をみるための現代国語、または和文英訳をふくめた英語）を課するという二次テストの実施案を提案したいのだが、なかなかうけ入れられそうにない。逆に文教育学部における地理学科の特異性が浮きぼりにされてしまうのがおちである。

先日のテレビで、数人の国会議員を交えた高校校家庭科授業の男女差別問題討論会を見たが、教師や親たちの熱心な議論がまるで空虚になってしまうような、生徒代表側の発言——僕たち、私たちは家庭科を男もやったらよいかどうかなどというよりも、大学受験で頭も時間もいっぱいなのです——に、いいようなない感慨を覚えた。

学問をするために大学に入りたいと思うのではなく、よい就職をするために大学を卒業したいから

大学に入るという発想が普遍化しつつある。入りやすい学科をさがすという受験技術の研究もふくめて、高校生の生活時間の大半を奪っている大学入試とは一体何であろうか。そしてこの現実を認識し、改革への熱意をもつ大学教官が果してどれだけいるのであろうか。